HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	海の見える丘に眠る零式艦上戦闘機 ： パラオ共和国バベルダオブ島アルモノグイ州
Author(s)	山村，高淑
Citation	戦争の時代 フィールド調査報告，1，1-11
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99407
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/
Type	research report
File Information	Report001 revised.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

戦争の時代
フィールド調査報告 01

海の見える丘に眠る零式艦上戦闘機
――パラオ共和国バベルダオブ島アルモノグイ州

山村高淑

北海道大学観光学高等研究センター

2026 年 3 月 31 日

山村高淑（2026）「海の見える丘に眠る零式艦上戦闘機」
『戦争の時代　フィールド調査報告』Vol.1,
北海道大学観光学高等研究センター（2026.3.31）

海の見える丘に眠る零式艦上戦闘機
——パラオ共和国バベルダオブ島アルモノグイ州

山村高淑

写真 1　アルモノグイ州の丘陵に残る零戦
手前にプロペラとエンジン、後方に垂直尾翼が見える。主翼、コクピット、胴体部分は腐食が激しく、草に覆われている。背後にはラグーンが広がる。
撮影地点：7.544675°, 134.530761°付近[1]（パラオ共和国バベルダオブ島アルモノグイ州）。2026 年 3 月 28 日／12 時 47 分、筆者撮影。

■　零戦への道のり

パラオのコロール島（Koror）から車で橋を渡り、バベルダオブ島（Babeldaob）に入ると、ほどなくしてＴ字路にぶつかる。ここを左折し、同島を一周する環状道路（Compact Road）に入る。そこから環状道路を道なりに 23km ほど進むと左手に、アルモノグイ州（state of Ngeremlengui）の州都であるイミオン（Imeong）につながる脇道[2]がある。ここを約 2.4km 進むと、右手に“ZEROZEN”と書かれた小さな木製の看板がある（写真 2）。これは零戦のこ

[1] 本稿では、位置情報の再利用や地図検索の便宜を優先し、緯度・経度は十進表記（度）で示す。必要に応じて度分秒表記に換算して読まれたい。なお、緯度・経度はカメラ内蔵 GPS により記録された値を基に、小数点以下 6 桁に四捨五入して統一記載している。数値の利用に際しては、機器および使用環境に起因する誤差を含む可能性がある点に留意されたい。
[2] イミオンの先はさらにアルモノグイのビーチにつながる。

とを指すものと思われる。以前訪れた方の記録によれば、かつては“ZEROSEN”と書かれた看板があったようである（山中 2019）。どうやら近年看板を作り直すときに“SEN”が“ZEN”になってしまったようだが、その経緯は明らかではない。

この看板の手前の小さな空き地に車を止め、看板がさす方向へ進む。ここからは丘陵地帯の未舗装路を歩くことになる。途中からは普通車では走行できない悪路である。時折降るスコールの中、約 30 分歩く。すると海（ラグーン）と草原とジャングルを見下ろす小高い丘に出る（写真 3）。そこから二股に分かれる道があったようなのだが、よくよく見ないと草が生い茂っていてわからない。向かって右側の道に入っていくと、草原の中に垂直尾翼がかすかに見える（写真 4）。その垂直尾翼を目印に、膝丈くらいの草をかき分けて丘を下っていくと、不意にさび付いたプロペラがはっきりと見えてくる。そこには、1 機の零式艦上戦闘機（以下、零戦）[3]が、80 年以上、物言わず眠り続けている（写真 5）。

■ 零戦の様子（2026 年 3 月 28 日現在）

前方にはプロペラと、それに直結したエンジンがあり、最後方には垂直尾翼と水平尾翼が、現在でもはっきりとその形をとどめている。近づいてみると、プロペラには〈住友金属工業株式會社プロペラ製造所〉の銘を現在も読み取ることができる（写真 6）。さらに尾翼には弾痕も確認できる（写真 7）。

一方、コクピットや胴体部分は腐食がかなり進み、原型をとどめていない（写真 8）。残骸は朽ち、土に還りつつある。主翼部分は草で覆われ、その下に隠れており、どのような状態であるかを確認することは困難であった（写真 9）[4]。

なお、過去 10 数年の間に現地で撮影された同機の写真記録が残っている。例えば、篠原直人（2012）、朝日新聞（2016）、山中浩市（2019）、悠久の沙羅双樹（n.d.）等は、撮影時の様子を詳細に記録した写真として非常に貴重なものである。これらの過去の写真を見ると、篠原氏が撮影した当時は機体周辺の草刈りもなされ、主翼部分もはっきりと確認できる（篠原 2012）。しかしその後、植物が生い茂り、機体を覆っていった様子がよくわかる。

筆者が現地で確認した限りでは、機体の周囲に説明板や標識は一切存在しなかった。保存措置が講じられている形跡や、周辺の草刈りが行われている状況も認められなかった。また、この機体が戦跡や遺産として地元（国や州）で法的に保護されているかどうかについても、今回の調査の範囲では確認できなかった。

---

[3] この零戦に関する公的な記録について、目下、筆者が確認した範囲では見つけることができていない。パラオにおける旧日本軍航空戦力に関する記録や研究が極めて限られているという背景もあろう。一方で日本において、個人もしくは小規模グループによる慰霊の旅の記録や戦跡調査記録、ならびに報道記録等において、同零戦に関する記述や記録が複数ある。これら記事等は、学術的な文献でこそないが、貴重な現地訪問記録であり、資料価値の高いものである。本稿ではこうした事情から、これら記事等を参考文献とし、これら記録・資料に、今回の筆者の現地観察記録を追加することで、今後の検証・議論の基盤となることを期したい。

[4] 零戦には複数の型が存在する。先行する戦跡調査記録の一つは、本機について「各部の特徴から零式艦上戦闘機五二型（零戦 52 型）であるとほぼ断定される」と述べている（悠久の沙羅双樹 n.d.）。しかし、この機体が 52 型であることを直接裏付ける公的資料は、筆者が確認した範囲では見出せなかった。

■ 同機体にまつわるナラティブ

パラオ戦史の調査研究を行っている篠原直人は、現地での聞き取り調査に基づき、同機は、1944 年（昭和 19 年）3 月 31 日に「米機動部隊」[5]がパラオを空襲した際に、同部隊の「艦載機 F6F」を邀撃するために「ペリリュー基地」より出撃した「第 261 海軍航空隊」の「零式戦闘機 28 機」のうちの一機であり、「第一中隊三小隊四番機として出撃」し、空戦により被弾、同地に不時着した「吉田久光（上等飛行兵）」の機体であるという見解を示している（篠原 2012）。篠原氏は島民の証言を照合し、不時着した機体は「間もなく、爆発炎上」、「吉田久光（上等飛行兵）」は操縦席から救出されるも、「重度の全身火傷と外傷により間もなく息を引き取った」と記している（篠原直人 2012）。また、篠原氏の調査をきっかけに、吉田上等飛行兵の遺族によるパラオ慰霊の旅も実現したとの報道もなされている（TBS NEWS DIG 編集部 2019）。

本稿では、これらの調査と証言の積み重ねに敬意を払いつつ、本機を「第 261 海軍航空隊所属 吉田久光（上等飛行兵）」[6]機とみなす見解（篠原直人 2012）を、有力な同定説として紹介したい。一方で、筆者の今回の調査では、搭乗員名を直接示す公的記録は、日本側・米側ともに確認することができなかった。この点は、今後の課題としたい。

なお、米機動部隊は 1944 年（昭和 19 年）3 月 30 日と 31 日の二日に渡り、パラオに空襲を行っている（齋藤 pp.205-206）。この間の「第 261 海軍航空隊」の動向に ついて、防衛庁防衛研修所戦史室（1968, pp.205-209）は次のように記録している。以下にその一部を引用する。

> **三月三十日の状況**（中略）〇九三〇（筆者注：09 時 30 分のこと。以下同様）、二六一空甲戦隊（三二機）が飛行隊長指宿正信大尉指揮のもとにサイパンを発進（中略）一〇五〇グァムに到着（着陸時二機破損）直ちに燃料補給を行い（中略）離陸（中略）。甲戦隊二六一空三〇機、二六三空二五機は一三三〇集合（中略）、進撃を開始（中略）。零戦隊は一機が発動機不調でグァムに引き返し、一機はヤップに不時着（更に一機がペリリューに到着していないが状況不明）、他は索敵を実施したが会敵せず一九〇〇ころペリリューに着陸し、着陸時爆弾孔により八機が破損、可動機は四四機となった。
>
> （防衛庁防衛研修所戦史室 1968, pp.205-207　下線は筆者）

> **三月三十一日の状況**（中略）〇六二〇ころ空襲警報が発令され、前日到着していた二六一空の甲戦二八機及び二六三空の甲戦一八機は邀撃のため発進（中略）。邀撃戦闘の状況は資料なく判然としないが、おおむね午前中には消耗したものと思われる（中略）。一四四〇ころ米艦載機の空襲は終わり、二六一空は F6F 一八機（内 不確実三）を撃墜したが、未帰還二〇名、重軽傷者四名、機材大破四、炎上四（未帰還機を含め二八機）

[5] Fast Carrier Task Force（TF 58＝アメリカ海軍高速空母機動部隊第 58 任務部隊）（Hough 1950, p. 14）。
[6] 篠原（2013）は、「第 261 海軍航空隊所属搭乗員一覧」をまとめており、そこに吉田久光上飛兵の名前の記載がある。

の損害を受け、二六三空も F6F 五機を撃墜したが、未帰還一五機、炎上二機、大破一機の損害を受け、前日到着した一航艦戦闘機は全部を消耗してしまった。

（防衛庁防衛研修所戦史室 1968, pp.207-209　下線は筆者）

■ パラオ空襲（1944 年 3 月 30～31 日）に関する史料

U.S. Marine Corps, USMC（米海兵隊）の公式記録 *The Assault on Peleliu*（Hough 1950）によれば、1944 年 3 月 30～31 日に行われたパラオ諸島に対する大規模な航空攻撃は、Fast Carrier Task Force（TF 58＝アメリカ海軍高速空母機動部隊第 58 任務部隊）による、米側作戦名 "*Operation Desecrate One*"（ディセクレイト・ワン作戦。Lester 1990, p.7）の一環として行われたものとされる。なお、"*Operation Desecrate One*" とは、"the covering actions for the Hollandia operation in New Guinea"（ニューギニア北岸ホーランジア[7]上陸作戦を援護する一連の軍事行動）を指す（Hough 1950, p. 14）。

このパラオ諸島に対する空襲の成果について、米海兵隊側の記録（米海兵隊司令部歴史部が公式資料に基づき編纂した作戦モノグラフ）には次のような記述がある。

> This attack proved to be even more successful than its perpetrators could appreciate at the time: the Palaus were permanently crippled as a naval base of real importance, and an estimated 160 Japanese planes were destroyed in the air or on the ground. (Hough 1950, pp. 14-15)
>
> （筆者訳）同空襲は実施当時に攻撃側が認識していた以上の成果となり、実質的にパラオは重要な海軍基地としては回復不能な打撃を受け、推定 160 機の日本軍航空機が、空中戦および地上で撃破された。

一方、日本側の公的な記録として有用なものに、史実調査部が編纂した『第 2 次世界大戦略歴—大東亜戦争経過概要—』（史実調査部 n.d.）がある。同書は、表紙に「大日本史實調査部」または単に「史実調査部」と記されており、軍令部作成の戦時資料を、終戦後に史実調査部が整理・追記したもので、戦争の経過概要を、昭和 16 年 12 月 8 日の「『ハワイ』攻撃」から昭和 20 年 9 月 2 日「降伏式調印」まで、約 4 年間にわたる日付順の年表として整理したものである。同書の「昭和十九年三月経過概要」の項には、1944 年 3 月 30～31 日のパラオ空襲について、以下のように記されている。

> 三十日
> 十一次ニ亘リ「パラオ」「ペリリュー」「メレヨン」ニ各種艦載機来襲（延約四五〇機）
> （中略）
> 被害略
> 「パラオ」方面空襲ニ依ル被害

[7] ホーランジア（Hollandia）は都市名。当時のオランダ領ニューギニアの都市で、現在のインドネシア共和国パプア州の州都ジャヤプラ（Jayapura）に当たる。

（一）沈没　明石、To×1　T×12　d 及其他×7[8]
（二）地上施設焼失破壊セルモノ 101
（三）戦死傷 246
（四）焼失未帰還機 8
（五）パラオ港内磁気機雷敷設

（史実調査部 n.d., 昭和十九年三月経過概要 三十日の項）[9]

三十一日
敵 KdB[10]ハ尚「パラオ」東方海面近距離ヲ行動中
「パラオ」「ヤップ」小型機ノ空襲ヲ受ク

（史実調査部 n.d., 昭和十九年三月経過概要 三十一日の項）[11]

この空襲は、日本軍の防衛ラインを地図上で一気に西方へ押しやる歴史的転換点となった。当時日本軍は、パラオを中部太平洋の重要防衛拠点として、マリアナ諸島やニューギニア北岸方面の防衛を維持していたが、「この空襲により、パラオは連合艦隊の待機位置となり得ず、遠くダバオ以西に後退しなければならなくなった」（齋藤 p.206）。すなわち、この空襲による敗北により、日本軍は防衛ラインを大きく後方へ引き下げざるを得なくなった。この後退ののち、戦局はサイパン、テニアン、ペリリューの陥落を経て沖縄戦へと至る。

■ おわりに

朽ちゆきつつある零戦。

海の見える丘の草原に、プロペラが立つ。

風を受けても回らぬそのプロペラは、墓標のようでもある[12]。

アルモノグイの丘には、風に揺れる草の音と、
遠くで鳴るスコールの雷鳴だけが響いていた。

---

[8] To、T、d はいずれも旧日本海軍関連資料に見られる艦船種別または船団・輸送符号に関わる略号であるが、その体系や定義は資料間で必ずしも一致しない。本資料の用例からは、それぞれ油槽船、輸送船、駆逐艦を指す可能性が高いが、他の解釈の余地も残されている。
[9] 旧漢字は引用にあたり常用漢字に改めた。
[10] 旧日本海軍関連資料には、〈機動部隊〉という表記と、それに対応する略号〈KdB〉を併記・対応させた記述が複数確認できる。本記述においても、文脈上、KdB が機動部隊を指す略号であると解するのが妥当であろう。
[11] 旧漢字は引用にあたり常用漢字に改めた。
[12] 筆者がパラオ・ペリリュー島のペリリュー墓地（Peleliu Cemetery）を訪れた際、航空機のプロペラを墓標とする墓があることを確認した（2026 年 3 月 27 日）。

写真 2　**“ZEROZEN”と書かれた木製の看板**
ここから先はダートとなり、車の走行が困難な箇所が複数あるため、この看板の手前の空き地に駐車するのが安全である。
撮影地点：7.530694°, 134.535172°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 00 分、筆者撮影。

写真 3　ラグーンと草原とジャングルを見下ろす小高い丘
撮影地点：7.539855°, 134.530078°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 22 分、筆者撮影。

写真 4　草原の中にかすかに見える零戦の垂直尾翼
写真中央やや右下部分に見える赤茶色の突起が垂直尾翼。
撮影地点：7.544064°, 134.530272°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 59 分、筆者撮影。

写真 5　草原の中に見える零戦のプロペラ、エンジン、垂直尾翼
撮影地点：7.544611°, 134.530731°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 56 分、筆者撮影。

写真 6　プロペラに残る〈住友金属工業株式會社プロペラ製造所〉の銘
文字が判読しやすいよう、天地を反転して掲載。
撮影地点：7.544694°, 134.530747°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 48 分、筆者撮影。

写真 7　弾痕が残る垂直・水平尾翼
撮影地点：7.544803°, 134.530747°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 53 分、筆者撮影。

写真 8　原型をとどめていない胴体部分
尾翼付近からプロペラ方面を撮影。
撮影地点：7.544719°, 134.530761°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 50 分、筆者撮影。

写真 9　主翼があったと思われる箇所
草で覆われ状態の詳細は確認できず。
撮影地点：7.544714°, 134.530761°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 50 分、筆者撮影。

写真 10　海の見える丘に眠る零戦
撮影地点：7.544661°, 134.530731°付近。2026 年 3 月 28 日／12 時 54 分、筆者撮影。

参考文献

朝日新聞（2016）「【サイパン・パラオ・チューク】戦火の残響　南洋を巡る旅」『戦火の残響』2016 年 8 月 29 日，〈http://www.asahi.com/special/gallery/senkano_zankyou/Palau13.html〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

防衛庁防衛研修所戦史室（1968）『戦史叢書 マリアナ沖海戦』朝雲新聞社，〈https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=012〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

Hough, Frank O. (1950) *The Assault on Peleliu*. Washington, D.C.: Historical Division, Headquarters U.S. Marine Corps. Marine Corps University, digital edition. Available at: https://www.usmcu.edu/Portals/218/Hough_The%20Assault%20on%20Peleliu.pdf (accessed 30 March 2026).

Lester, Robert E., ed. (1990) *A Guide to the Microfilm Edition of World War II Research Collections: U.S. Navy Action and Operational Reports from World War II, Pacific Theater, Part 3: Fifth Fleet and Fifth Fleet Carrier Task Forces*. Bethesda, MD: University Publications of America. Available at: https://www.bsb-muenchen.de/mikro/lit2463.pdf (accessed 30 March 2026).

齋藤達志（2025）「第 11 章 絶対国防圏体制の強化と破綻――太平洋正面を中心に――」防衛研究所戦史研究センター編『近代東アジアの軍事史』防衛省防衛研究所，pp.196-216，〈https://www.nids.mod.go.jp/publication/militaryhistory_research/mh_tokushu/eastasia_military_history/pdf/emh01_13.pdf〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

史実調査部（n.d.）『第 2 次世界大戦略歴―大東亜戦争経過概要―』（戦時中の軍令部作成の資料を、戦後の史実調査部が整理・追記したもの。）現在の所蔵は，JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C16120723200、第 2 次世界大戦略歴大東亜戦争経過概要（防衛省防衛研究所），〈https://www.jacar.archives.go.jp/das/meta/C16120723200?&page=1〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

篠原直人（2012）「誇り高きサムライここに眠る　パラオの零戦」『空のカケラ　ライブラリ』2012 年 8 月 13 日，〈https://soranokakera.lekumo.biz/tesr/2012/08/post-8ba6.html〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

篠原直人（2013）「第 261 海軍航空隊」『空のカケラ　ライブラリ』2013 年 6 月 28 日，〈https://soranokakera.lekumo.biz/tesr/2013/06/261-fd76.html〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

TBS NEWS DIG 編集部（2019）「死を覚悟　日本兵の思いとは・・・“最後の手紙”を高校生に」『note』2019 年 8 月 20 日，〈https://note.com/tbsnews/n/n947c2ad45c64〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

山中浩市（2019）「パラオ本島に残る零戦吉田機」『Ameba ブログ』2019 年 8 月 20 日，〈https://ameblo.jp/gokoku-jinjya/entry-12509535016.html〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.

悠久の沙羅双樹（n.d.）「バベルダオブ島：アルモノグイ州」『戦跡の歩き方』n.d.,〈https://senseki.jp/palau-koror21/〉（参照 2026 年 3 月 30 日）.